海外で心に残った記憶と背景

（ロシア・ヤクーチア編）

2024 年 1 月記　　松村　眞

はじめに

海外を訪問すると、予期しない体験をして驚いたり感心したりすることがある。見聞きして面白く思うこともあれば違和感を覚えることもある。日本を訪れた外国人と接しても同様で、その時の記憶は時が経っても容易に忘れない。意図的な結果ではないから他人に伝える機会は少ないが、印象が強いのでその後の参考になることも多い。本稿ではロシアとヤクーチアで経験し見聞きした驚きや違和感について、事例の状況と考えられる背景を紹介する。

モスクワの製油所と西シベリアの油田調査（1992 年 3 月）

1991 年にソ連邦が崩壊して社会的な混乱が生じ、ロシアの製油所と油田地域で環境汚染が発生していることがわかった。そこで外務省を中心に日本政府として調査団を派遣し、実情を調べて日本からの支援方法を検討することになった。調査団には石油の環境問題に詳しい人材の参加が必要なことから、日揮にも派遣の要請があり私が参加することになった。国からの要請なので、パスポートは渡航先がロシア限定の公用旅券が支給された。公用旅券は黒表紙で、表面に「公用旅券、OFIICIAL PASPORT」と書かれていた。これまで個人用の赤表紙しか知らなかったが、公用旅券だと入出国の窓口が別で待たされることがなく、審査が非常に簡単なことがわかった。

約 15 名の調査団は、まだ寒い 3 月にモスクワに行き、関係機関から状況を聞いてモスクワ近郊の製油所を訪問した。製油所では所長から説明を聞き現場を案内された。プラントはメインテナンスが不十分で、蒸留塔や配管の保温材カバーが錆びて茶色くなっていた。排ガス処理や排水処理も不十分だったが油漏れの兆候はなく、火災の危険性は感じなかった。現場を見た後の所長との面談で、製油所の運営形態が日本や欧米諸国と大きく異なることに驚いた。製油所長の権限が非常に小さく、日常の運営管理に限定されていたのである。処理する原油を決めるのも、環境対策を立案するのも中央政府の官僚だった。現場の所長は環境問題を認識しても、設備の整備計画に関与できる立場にはなかったのである。ガソリンや灯油など石油製品の需要先とおよその価格を質問したが、所長はほとんど知ら

ず即答できなかった。経営には全く関与せず、関与しないから石油製品の需給状況も知らなかったのである。

日本の製油所も現場の所長は経営に関与しないが、自社製品の販売先や大まかな販売価格は知っているし環境対策も自ら率先して実施している。環境問題は主に地方の製油所で発生するから、対策も実情を熟知した現地の製油所が主に計画して実施するのが望ましい。その意味で主要な判断のすべてを、実プラントを見ていない政府の官僚に任せてよいのか大いに疑問を感じた。製油所を訪問した後、調査団は他の製油所と発電所を訪問するグループと、西シベリアの油田を訪問するグループに別れることになり、私は油田の町・ストレジェボイに行くことにした。

出発予定の夕刻、モスクワ郊外のビコボ空港は寒くて暗い夜を迎えていた。この空港はモスクワにある四つの空港のうちで一番小さく国内線専用である。華やかな国際線の空港と違って照明が暗く、人は多いのに売店もレストランも見当たらなかった。発着を告げるボードが故障しているのか、フライトの時刻が数時間もずれていた。われわれが乗る予定のシベリア行きの深夜便は案内の掲示もなかった。しかし、ひどく尊大な女性係官に聞いて、どうやら間違いなく飛ぶことを確認してひたすら待った。熱いコーヒーが飲みたかったが、コーヒーショップはもちろん日本ならどこにでもある自動販売機もなかった。

やっと予定の飛行機が着いて準備が整い、われわれはスーツケースを引いてターミナルからぞろぞろと飛行機に向かって歩いた。風が冷たくて耳が痛く、ちらつく小雪が襟もとで小さなしずくになった。マフラーで顔をおおい、コートの襟をたて片手で押さえながら後尾のタラップから機内に入り込んだ。飛行機は 120 人乗りのイリューシンで、座席は指定ではなく先着順だった。われわれは順番が早い方だったから窓際の席を取ることもできたが、あえて通路側にした。窓から眼下に広がるシベリアの大地を見たかったが、窓側はうっかりするとひどく寒いのと、満席だとトイレにも行けないからである。

予想どおり機内は、大柄の上に分厚いコートで着膨れしたロシア人で満席になった。手荷物とコートで手足も動かせない。だいぶ遅れて離陸した飛行機は、途中で給油のためウファに１時間ほど着陸し、６時間後に小さな油田の町ストレジェボイに着いた。このフライトの機内サービスは、コップ一杯の炭酸水だけで食事もスナックもなかった。座席の横にも後にもテーブルがないところをみると、国内線には飲食のサービスがないのであろう。

機内で一度だけトイレに行ったが便座がない。それに便器が日本では想像できないほど汚く、とても用を足す気がしないので着陸するまで我慢した。観察してみると、ロシア人の乗客も数時間のフライト中はほとんどトイレに行かずにじっとしていた。状況をよく知

っているのであろう。

西シベリアの石油の町ストレジェボイ

ストレジェボイは油田が発見されてできた人口 4 万 5 千人の小さな町である。モスクワから東に約 3000 キロメートル離れたオビ川の沿岸にあり、郊外には多くの油井がある。数十の油井で採掘された原油は地区ごとの集積センターに集められ、50%以上も含まれている水分を除去してパイプラインで送り出されていた。水分は再び油井に戻すのである。西シベリアにはこうした油田の町が数多く散在していて、これらの点と点の間を人は飛行機で、貨物はトラックで、石油はパイプラインで運ばれている。ストレジェボイはロシアで最大といわれるチュメニ油田の一画にあるが、地理的には東の端の方に離れている。このため行政区分はチュメニではなくトムスク州に属している。州都トムスクは 30 万都市で大学もあるが、ここから 500 キロメートルも離れているので、ちょっと町まで遊びに行くというわけにはいかない。

翌日の昼前に空港に着いたわれわれは、チャーターしたバスで町に入った。あたりは一面の雪と氷の世界で、町から少し離れたところには針葉樹の黒い林が散在していた。滞在中に気がついたのだが、このあたりに山や丘はなく全くの平地といってよい。空はどんよりと曇っていて、この季節、青空は全く見られない。だから色彩に乏しく、モノクロの世界のようだった。やがてバスは、この町では高級と言われたホテルに着いた。 4 階建てで地下が倉庫、 1 階がロビーとダイニングルーム、2 階と 3 階が客室になっていて、40 人ぐらいは泊まれそうだった。二重になっている重い木の扉を押し開けてロビーに入ると、さすがに中は温かい。しかし防寒のためか窓が小さく、そのために内部はかなり暗かった。このホテルは四角い建物なので、2 階と 3 階は真ん中がホールになっており、その周囲に客室が配置されていた。

私の部屋はツインで入り口の右側がバスとトイレ、左側がクローゼットになっていて、奥が 12 畳ぐらいの寝室になっていた。寝室の両側には壁に接して二つのベッドが置かれており、その間に小さなテーブルと椅子があった。外の気温は零度以下なのに室内は暖かく、20 度以上はあったと思う。しかし部屋全体は暖かいのに一部に冷たい風が入ってきた。点検すると二重になっている窓の外側のガラスが割れていて、外気が内側の窓の隙間から入ってきていたのである。そこで、こんなこともあろうかと思って持参したガムテープでガラスの割れ目をふさぐことにした。しかしやってみるとガムテープがすぐにはがれて、くるくるっと巻いてしまう。一瞬だめかなと諦めかけたが、うまくつかないのは温度が低くて接着力が弱いからだと気がついた。そこで今度はガムテープを手のひらでしばらく抑え、体温で温めたらはがれなくなった。

次にトイレを使おうとしたら便座がない。それに水を流したら、今度はいつまでも止まらない。ブロータンクのふたを開けてみたら、フロートが上がって水を止めるようになっている突起が錆びついている。やむなくブロータンクのふたを開けっ放しにして、毎回手で水を止めることにした。トイレの次はバスである。バスといっても、足のついたバスタブが「ごろん」と置いてあるだけなのだが今度は栓がない。それに不潔ではないが、かなり汚い。水質が悪いのだろうか、水垢がバスタブに黒くこびりついている。そんなわけで、結局、このホテルに滞在した 3 日間はバスを諦めた。

なお、テレビはあったが画像が映らないし、ラジオはガーガー言うだけで音声にならなかった。サービス業といえども、競争原理にもとづくモチベーションがないと、こういう結果になるということがよく解った気がする。もちろん個人の家庭は、飛行機やホテルよりずっと手入れが行き届いているはずだ。これは後から聞いた話だが、トイレの便座は便器の数しか作らず、バスの栓はバスタブの数しか作らないそうだ。理屈からいえば同じ数しか必要ないからだそうだが、便座は壊れるしバスの栓だって長い間には硬くなって使えなくなる。でも本来が同じ数しかないのだから、必要になった人はやむなくホテルや公共の施設から失敬するらしい。計画経済の硬直性が原因だろうが、予想もしない事態が起きるものだと思った。

ホテルに着いた次の日、われわれはバスで油井と原油の集積センターを見に行った。新たな油井をボーリングしているサイトでは、零下 30 度の寒気の中で作業員が働いていた。彼らはトレーラーで寝泊まりしながら、夜間も交替で戸外の掘削マシーンを操作していた。われわれがなにげなく使う灯油やガソリンの生産に、こうした厳しい労働がともなっていることを思い知らされた気がする。油井の次には集積センターを案内されたが、歩きながら施設を見学するのが非常に寒い。厚いズボン下を 2 枚重ねているのに、足元から「じわー」と寒気が上がってくる。風が少し吹くだけで耳がちぎれそうで、案内してくれる係官には申し訳ないが、多少見落としてもいいから早く終わりにして欲しいと思った。寒いとは聞いていたし覚悟もしてきた。大きい毛皮の帽子と長くて重いコート、それに深くて厚いブーツで完全武装してきたのだが、さすがに零下 30 度の寒気は厳しい。よくまあこんなところに人々が住んで働いているものだと感心した。

次にホテルのまわりのシベリアの人々の生活を紹介しよう。まず住宅だが、すべてが 5 階から 10 階建ての集合住宅で、日本の古い公団アパートによく似ている。ベランダには、これも日本と同じように洗濯物が干してある。零下 30 度では乾く前に凍りついてしまいそうに思うのだが、聞いてみるとよく乾いて気持ちがよいそうだ。湿度が非常に低いので、おそらく凍った水分がそのまま蒸発しまうのだろう（昇華）。ベランダに食料品を吊るし

ている家が多い。それもポリ袋に包んだ大きな肉の塊をよく見かけた。天然の冷凍庫というわけである。なお、集合住宅には各戸に温水供給配管が敷設されている。熱供給の費用は占有面積に応じて負担するようになっているのだが、ほとんど無料に近い値段のようだ。

作業員のトレーラーハウス（上）
石油掘削機（右）と筆者

ちなみにシベリアの人たちの収入は、寒冷地という理由でモスクワの 10 倍程度に設定されている。だからロシアでは豊かな階層に属しているのだが、お金があっても物がない。ホテルのそばのコンビニみたいな食料品店に入ってみたが、売っていたのはパンと小麦粉、それに赤っぽいジュースだけで陳列棚はガラガラだった。それでもレジには太ったおばさんがニコリともせずに座っていて、商品を売っているというより、盗られないように監視している感じだった。面白いことに、戸外でアイスクリームを売っていた。あまり安くはなかったが、まとめて 3 個、5 個と買っていく人がいた。売る方も買う方も極寒に耐えながらの商売に呆れたが、きっと家の中はアイスクリームを食べたいほど暖かいのに違いない。寒冷地で娯楽施設が乏しいことから、多くの人が毎日 6 時間以上もテレビを見ているとのことだった。

アイスクリームを売る人と買う人

多少脱線するが、ロシアの若い女性にはきれいな人が多い。細身でスタイルがよく、肌の色がぬけるように白くて頬だけが薄いピンク色に染まっている。しかも結構おしゃれで、顔の化粧はもちろんのこと、どこで手に入れるのか洒落たイヤリングやブローチも身

につけている。町や店では思わず目を止めて眺めたくなる美人をよく見た。こうした女性が年をとると、どうしてあの一様に太ったおばさんに変身するのか理解に苦しむ。子供は見とれるほどかわいく、まるで生きている人形のようだ。

シベリアの人たちが渇望しているのは野菜である。そのため、この町では大きな温室でトマトやキュウリを栽培していた。温室の中は夏のように暖かく、20度以上に保たれていた。ガラス1枚の外側が零下30度で内側がプラス20度だから、この温室はものすごくエネルギーを消費しているのに違いない。モスクワにも、いくつも数ヘクタール規模の温室があり、やはり野菜を作っている。もちろんかなりのエネルギーが必要だが、この国はエネルギーが豊富なので湯水のように使っているように見えた。

西シベリアの温室

ガソリンは1リットルが 2 円ぐらいで、収入に対してもひどく安い。モスクワの地下鉄はソ連の崩壊後に 10 倍に値上げしたが、それでも 10 円ぐらいだった。要するにエネルギーと家賃、それに公共交通費がメチャクチャに安く抑えられていたのである。一方、家庭で使う耐久消費財は供給が少なく、運よく手に入っても値段が非常に高かった。しかし現在は自由化され、供給量が増えて価格が下がっているのではないだろうか。

モスクワの街

シベリアからモスクワに戻って街を見物した。モスクワは零下 5℃ぐらいだったから、日本から着いた時は寒いと思ったが、シベリアから戻った時はずいぶん暖かく感じた。短時間なら毛皮の帽子や手袋がなくても外を歩けるのが嬉しい。スターリンの時代に囚人の労働で造られた地下鉄に乗り、モスクワの繁華街を歩いて休日を楽しんだ。

モスクワの地下鉄駅構内

地下鉄は防空壕を兼ねて地下深くに建設されており、地上と地下駅は長いエスカレーターで結ばれている。エスカレーターの速度は非常に早く、乗り降りに最初はちょっと戸惑った。老人でも大丈夫なのだろうか。地下の駅舎は天井が高く、駅によっては壁だけでなく、天井にまで美術館にあるような絵が描かれている。壁や階段の手すりには無造作に大理石が使われており、その贅沢さに驚いた。この地下鉄は費用を無視して造られたのであろう。電車は 1 分間隔でひっきりなしに走っているが、滅多にトラブルがないというからたいしたものである。

地下鉄を降りて今度はモスクワの原宿といわれるアルバータ通りを歩いた。両側にはお土産を売る小さな店がずらりと並んでいた。売っていたのは、マトリョーシカと呼ばれる中が幾重にもなった木製の人形が多かった。絵画や食器、小さなバッジの類や共産党の記章、それに軍の帽子なども売っていた。

マトリョーシカ人形

私はモスクワの風景を描いた水彩画 2 枚とバラライカを買ったが、金を払う時に問題が生じた。手持ちのドルで買おうとしたのだが、警官に見つかると面倒なことになるらしい。そこで金を直接渡さずに、一旦、そばのマトリョーシカ人形にそっと入れる。すると売り手はタイミングをはずして金額を確認し、それから品物をくれる段取りになっていた。このアルバータ通りに沿った建物もそうだが、モスクワの建築は、一般的に古いけれどもそれぞれに芸術的な装飾が施されている。美術館のような外観のデパート（グム百貨店）や、貴族の豪邸のようなアパートがあったりする。そのなかでもボリショイ劇場の豪華さや、クレムリンの美術品には圧倒される思いがした。アルバータ通りに沿った建物もそうだが、モスクワの建築は一般的に古いけれどもそれぞれに芸術的な装飾が施されている。

街で見るモスクワの人々には活気があり、市場には肉や果物があふれ、まるでアメ横のように混雑していた。モスクワ大学前の広場では、結婚パーティーを終えたばかりの人達が集まって、踊りながら陽気に騒いでいた。国営の商店には品物が少なかったが、統計に現れない闇の経済が発達していて、人々は所属する企業体から多くの生活物資を手に入れていた。人々は大きな経済の混乱の中にあってもしたたかに生きていた。短い滞在だったが、ロシアの広さと人々のたくましさを目の当たりに見た気がした。

グム百貨店

アルバータ通り

ロシアの社会的な背景

① ロシアは現在も中央政府による強力な中央集権体制が続いており、企業も政府の指示や命令に従わなければならない。社会主義時代の制度と統制が色濃く残っており、国民にも資本主義意識が浸透していない。政治体制は民主主義とされ大統領は選挙で選ばれることになっているが、選挙は透明性が低く限られた候補者の互選に近い。

② 大統領の権限が強大なため、独裁政権に近い政策決定が可能である。

③ エネルギー産業・大規模製造業・基幹輸送事業は国営に近い。製造業は下流に近づくほど資本主義体制に近くなり、農業と末端のサービス業はほぼ民営である。軍需産業の規模が大きく突出している。

④ 国民の所得格差が大きく低所得者が多い。しかしエネルギーと食料の自給率が高く、住宅も確保されているので外見上の貧困層は目立たない。

サハ共和国（ヤクーチア）（1994 年 5 月）

1994 年に顧客筋の大手ガス会社から、サハ共和国（ヤクーチア）の天然ガス開発プロジェクトへの協力要請があった。具体的には、第 1 段階として事前調査に日揮から人材を派遣して欲しいとの依頼である。天然ガスの開発には環境問題が関連するのと、天然ガスの特性と精製に知見があることから私が参加することになった。

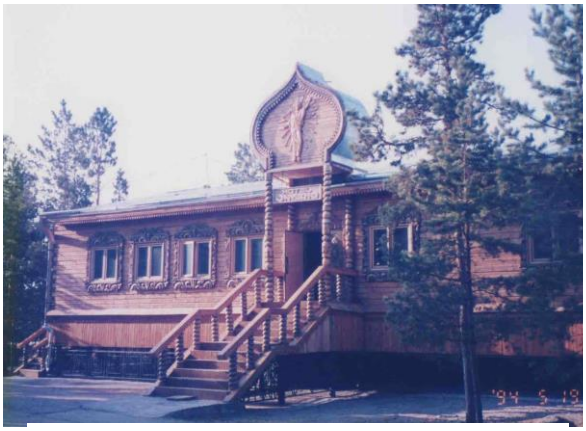
ヤクーチアは旧ソ連邦の一角だったサハ共和国の別名で、バイカル湖の北東約 3000 キロメートルの東シベリアにある。主都はヤクーツクで、水運に便利なレナ川に沿って発展してきた。ヤクーツクの北方には大規模な天然ガス資源があり、開発できれば日本に輸入

できる可能性があるというのだ。ヤクーチア政府も、外資の導入による開発を希望していた。ヤクーチアの面積は 310 万平方キロメートルで日本の約 8 倍である。一方、人口は 106 万人に過ぎない。インドに近い広大な面積に、横浜市の三分の一ほどの人口と思えばよいであろう。国全体が永久凍土地帯だが、夏季には表層の 30 センチから 50 センチほどが溶けて、いたるところが小さな池や沼のようになる。国土の 4 割が北極圏で、7 割がタイガ（針葉樹林帯）である。人種は原住民のヤクート人が 33%、ロシア人が 50%、ウクライナ人が 7%である。

世界で最も寒い国と言われ、1 月の平均気温は零下 41℃、厳寒期には零下 50℃から 60℃になる。盆地になっているオイミャコン市には、過去に零下 72℃の記録がある。しかし夏は気温が上がり、7 月は昼間の気温が 30℃を超える日がある。寒暖の差が非常に大きく、典型的な大陸性気候である。交通は長距離が空路で、短距離は車両を利用している。冬季は河川が凍結するので、車両による長距離輸送が可能になる。鉄道は一部の炭鉱地区で使用されているだけである。主要な産業は鉱業、林業、畜産業で、石炭、木材、天然ガス、金、ダイヤモンド、非鉄金属を産出している。畜産業は牛馬とトナカイが中心である。

ヤクーツクに行くには新潟空港からハバロフスクに行き、内陸行きの飛行機に乗り換える。このため新潟空港で出国手続きを済ませ、搭乗を待っていたがなかなか搭乗ゲートが開かない。しばらく待たされた後、予定していたエアロフロート航空のアナウンスがあった。ハバロフスクの空港が雪で、出発できないというのである。やむなく新潟市内のホテルに一泊することにしたが、スーツケースは機上に載せてしまったから、手荷物だけを持って日本に再入国することになった。出国手続きをしてから、飛行機に乗らずに日本に再入国したのは初めてである。

翌日は天候が回復したので約 2 時間のフライトでハバロフスクに着いた。飛行機はツボレフ 154 というロシア製だった。数時間後、今度は 1 時間半のフライトでヤクーチアに着いた。着いたのは夜の 9 時頃だったが、アイスランドに近い高緯度地域なのでまだ明るかった。ホテルはカナダとの合弁事業で建てられたペンション風の建物で、木造の洒落たデザインだった。このホテルに 3 日間滞在し、現地のオフィスに通って情報交換をしたが、往復の車窓から見る風景は他の国と大きく異なっていた。



ヤクーチアのホテル

一つは道路に沿って敷設されている温水のパイプラインで、地上１メール程度の高さで延々と伸びている。道路が交差するところや建物の前は５メートルほど高く立ち上げて、交通の妨げにならないようにしてある。気になるのは保温で、まるでボロ布を巻きつけただけのように見える。配管の保温は、通常は保温材の外側にカバーを取り付けるのだが、ここではそうした対策がない。カバーがないと熱損失が多く、雨に濡れると保温性が著しく低下する。しかし天然ガスが豊富なので、熱損失はあまり気にしないのかもしれない。保温材には、通常は珪酸カルシウムの成形品が使われるが、ここでは帯状の保温材を鋼管に巻きつける方法が採用されていた。成形品だと配管のサイズごとに用意する必要があるからであろう。

市中に伸びるパイプラインと保温

地中に沈み込んだ木造住宅

もう一つ気になった奇異な景色は、郊外に多く見られる歪んだ木造住宅である。住宅が永久凍土の上に建てられるので、冬は氷の上に乗っているようなものなのだ。しかし夏になると表土が溶けるから、家が少し沈んでしまう。次の冬になると表土が凍って家をせり上げ、夏になるとまた沈む。こうした繰り返しで徐々に家が歪みながら沈み、住めなくなると放棄してしまうのである。永久凍土の宿命とはいえ、窓の近くまで沈んでしまった家が多く見られた。カーテンが残ったまま大きく歪んで沈んだ家を見るのは悲しい。

一方、ヤクーチアの人口の２割、約 20 万人は木造住宅ではなく、ヤクーツクの集合住宅に住んでいる。5 階から 10 階建ての鉄筋コンクリート製で、遠くから見れば日本の集合住宅と大きく変わらない。違うのは高床式になっている点で、１階の床面を地上から４メートルぐらい高くしてある。地表から屋内に冷気が直接伝わるのを防ぐのが目的と聞いたが、

夏は地表のほとんどが湿地のようになるので、構造物の地上設置が困難だからである。鉄筋コンクリートの建物や集合住宅は、基礎杭を夏でも溶けない永久凍土層にまで打ち込み、その上に建てるとのことだった。木造住宅のような不等沈下を避けるためである。

ヤクーチア政府は天然ガスを開発するために外国企業に鉱区を開放しようとしており、既にオーストリアとアメリカの企業が開発を進めていた。日本向けには３鉱区を用意し、経済性を含む実現可能性の検討を望んでいた。今回の説明で量的には充分なことと、採掘に技術的な阻害要因が少ないことがわかった。しかし、他国のガス田に比べて圧力が非常に低い。このため、埋蔵量が豊富でも回収率が低い水準に留まる可能性が浮上した。もう一つの大きな問題は輸送である。日本に輸出するには、臨海部まで 3200 キロメートルのパイプラインを敷設しなければならない。しかもルートの大半は構造物が夏季に沈下しやすい永久凍土で、高い山脈も超えなければならない。このため、輸送コストが高価になる問題が予想された。臨海部に建設する液化設備にも大きな費用が必要なので、経済性を含む実現可能性を定量的に確認することになった。

オフィスでの 3 日間の会合が済んだ次の日、われわれはガス田の採掘現場を見に行った。ガス田はヤクーツクチから約 250 キロメートル離れているので、政府がロシア製のヘリコプターを用意してくれた。ヘリに乗るのは初めてで、旅客機とは違うから多少の不安があったが、飛行は思ったより安定していた。20 人乗りぐらいで、前方がコックピットになっており、両脇に細長い燃料タンクを備えていた。ヘリが飛ぶ高度は地上 300 メートルぐらいだから、眼下の景色がよく見えた。ほとんどが平坦な地形で、5 月だから凍土が溶けた沼地が多かった。冬季は雪と氷の大地だろう。ところどころに直線道路が延びていて、伸びた先に小さな集落が見えた。

ガス田の往復に使ったヘリコプター

ガス田がある場所には、通称クリスマスツリーと呼ばれるガス井があり、関係者がガスの噴出状況をわれわれに示すために着火してガスの勢いを見せてくれた。数十のガス井からガスを集めた場所に不純物を除く処理プラントがあった。工程はかなり単純で、水分除去だけのように思われた。たぶん、硫化水素のような有害成分の含有量が少ないのだろう。

ガス井戸の燃焼テスト

ガス精製設備

ガス田の調査から戻った次の日には、ヤクーツクの郊外にある永久凍土研究所を訪問した。入口にはマンモスの像があり、中に入ると地下に降りる階段があった。階段を降りるにつれて温度が低くなり、壁一面が固い氷で覆われていた。その先の地下 12 メートルの場所に凍土地下室があり、周囲は穴を掘ったままの地肌だった。地肌といってもただの土壁ではなく、乾いた草が一面に残っていた。凍土になる前は沼底だったらしく水草が繁茂していたのである。

永久凍土研究所

100 平方メートルほどの凍土室の一角には、透明なプラスチックに埋め込まれたマンモスのレプリカがあった。1.5 メートルほどの子供のマンモスである。本物はサンクロペテロブルグの研究所にあり、発見した時は生きているように横たわっていたそうだ。まだ肉に赤みがあり胃の中には未消化の食べ物もあったらしい。なお、凍土室で写真を撮ると 1 枚 1 ドルを請求された。研究所の維持費に使われるらしい。この研究所では、凍土の溶解による陥没や泥流発生のメカニズム、それに建築物への影響を研究していた。

研究所訪問の次は大統領との会見があり、大統領が天然ガス開発への期待を熱っぽく語った。また、新たに大規模なダイヤモンド鉱山が発見されたとのことで、会見後にダイヤモンド展示場・兼・即売場に案内された。値段は産地直売だから安かったのだろうが、出

張時の小遣いで買える金額ではなかった。それより政治家である大統領が、自らビジネス活動に関与するのに違和感があった。しかし、人口 100 万人の国は日本の政令都市の規模だから、首長が事業活動をしても不思議ではないのであろう。少しの時間だが、ヤクーチアの繁華街も散策した。デパートはそれなりに賑わっていたが、照明が暗く客は多くなかった。なぜか「琥珀」の売り場が多く、ネックレスや腕輪などが沢山売られていた。

少し郊外に出てレナ川のほとりに行った。5 月中旬なのに川はまだ一面の氷で、市民は氷が動く日をカウントダウンしながら待っていた。長い冬が終わるのが待ち遠しいのである。川の氷が解けると北極海から大型の貨物船が来られるようになるので、新鮮な野菜や日用品が手に入るのである。ヤクーチアの 5 日間の滞在が終わり、大統領が用意してくれたジェット機でハバロフスクに戻った。定期便は週に数回しか飛んでないからである。途中で給油のために辺鄙な空港に降りた。給油設備があるだけでターミナルも管制塔もなく、もちろん乗降客もいなかった。給油専用空港のようで、ガソリンスタンドにあるのと同じようなホースのついた給油塔があった。給油作業はセルフサービスで、パイロットが自ら給油ホースを伸ばし、主翼にある給油ノズルを開けてドボドボと給油していた。珍しくて面白い情景を見た気がする。

レナ川の畔で氷の解けるのを待つ人

ヤクーチアで乗ったチャーターフライト

フライトの関係で、ハバロフスクに 1 日滞在して市内を観光した。大都市だけあって自由市場は肉や野菜が豊富だった。市場のそばにラーメン店「サッポロ」があったので、1 週間ぶりに日本の味を楽しんだ。お土産屋は露店ではなく建物の 1 室になっていて、入ると広い部屋に人形や絵が並べられていた。日曜だったので、ホテルのそばの川岸にピクニックの家族連れや若いカップルが来ていた。なにげなく見ていたら、カップルの女性が、突然、服を脱いで白い肌も露わに日光浴を始めた。気温は 20℃以下だったと思うが、太陽の光を浴びたかったのであろう。

出国手続きでは問題が起きた。スーツケースの荷物検査が非常に厳重だったのである。ルーブルの持ち出しは厳しく制限されていたが、ルーブルだけでなくキャビアも数量制限があって、小さな缶も 3 個以上は没収された。意外だったのはマンモスの象牙でできた小物類だった。ヤクーツクのホテルで買うときは問題ないと言われたのに、小さくても 3 個以上は没収された。発掘されたマンモスの象牙だから問題ないと思ったのだが、ルーブルと同様に国有財産の流出とされたのである。この検査でほとんどのメンバーが何か没収され、抗議と説明の応酬に長時間を要した。写真の小さい象牙彫刻は没収を免れた 1 個である。それだけに、やっとロシアを離れて機上の人となった時は安心した。短期間だったが見る物も聞く事も珍しく、忘れられない強い印象が残った。

ハバロフスクの自由市場

マンモスの象牙土産

ヤクーチアの社会的な背景

産業は鉱業、林業、畜産業（牛馬とトナカイが中心）で、石炭、木材、天然ガス、金、ダイヤモンドを産出している。ロシアの行政管理下にある共和国なので、ウクライナ向けの軍事動員にも応じたであろう。モスクワから地理的に遠く産業の関連性も薄いので、半強制的に徴集された兵員には気の毒な気がする。

海外で心に残った記憶と背景（ロシア・ヤクーチア編）終わり